

TOEIC の授業における Google Form の利用とその結果分析

The Application of Google Form to the TOEIC Class and its Effects

西部 真由美

NISHIBU Mayumi

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: mnishibu@vega.aichi-u.ac.jp

Abstract

This paper aims to report the introduction of the new on-line answer sheet to college English classes for TOEIC. The on-line answer sheet for TOEIC drills made on Google form, of which URL I have uploaded on my Moodle course, enables the teachers to understand the correct or wrong answer rate of each question and student. The results of the analysis by Google form provide us with the basic statistical information, questions of low rate correctness, the date and time the student entered the answers, and all students' answers on the spreadsheet. These functions may help teachers solve the persistent problem that they cannot grasp every student's level of understanding and English skills in class, and discern what to focus on and instruct for the students.

1. 大学における TOEIC 向け授業

就職活動において重要視されているビジネス英語テスト TOEIC の対策として、日本の大学では英語の正課授業のなかで TOEIC を学生に学習させる取り組みが広がっている。本学では、ほぼ全ての学部において1年時の秋学期（つまり後期）に必修科目「TOEIC I」を設置している。この授業を担当する専任教員で構成される委員会で運営方針を検討し、その方針に沿って全学部の授業を展開している。委員会では推薦テキストのリストを作成し、教員の大半は推薦テキストを用いて授業を行っている。成績評価も一律で、授業内の

評価 50 点、授業終了後に 1 年生が一斉に受験する TOEIC-IP のスコアの換算値が 50 点となっている。

筆者が所属する国際コミュニケーション学部英語学科のクラスでは、1 年間に TOEIC スコア 100 点アップを目標に授業を行っている。学科の特徴として、学生は TOEIC のスコアに敏感で、比較的の高いモチベーションを持って早くから自主学習をしている学生もいる一方で、TOEIC の問題、特にリーディングの問題に太刀打ちできず、問題が難しすぎると困惑している学生もいる。学生には卒業までに 800 点取得が望まれるので、1 年時に TOEIC に特化した授業を受講できれば、早くから自分の学力不足を認識し、目標を設定して以降の勉学の計画を立てることができるという利点がある。

2. 実践の目的と概要

2.1 授業の概要

筆者は、担当する TOEIC I のクラスで、上級向けテキストである *Successful Keys for the TOEIC Listening and Reading Test 3: goal 700* (Stafford, 2017) をここ数年間使用し、演習形式で授業を行っている。

授業では、受講生に制限時間内に問題を解いてもらい、その後で教員の解説とともに答え合わせをしている。授業時間の前半でリスニングを 20 問解き、そのあとでスクリプトを見ながら再度音声を確認して語彙と内容の確認をする。後半は、17 問か 18 問のリーディングの問題を 12 分間で解いてもらい、その後で語彙・内容確認をしながら答え合わせをする。13 回目の授業までこの様式でテキストの問題を解いていき、受講生は各自で単語ノート（メモ帳）を用意して新出語彙を記録したり教員の板書を書き写したりする。14 回目の授業時間は、教員が作成した語彙テスト（100 問）を行い、授業時間内に答え合わせをして頻出語彙の確認をする。冬休みを挟んで、15 回目の授業時間には、付属教材のミニ TOEIC テストを実施し、現時点での受講生の予想スコアを算出している。この後に受講生は、授業終了後の 1 月中に大学が実施する TOEIC-IP を受験し、正式なスコアを取得する。

筆者はこれまでに様々なタイプのテキストを用いて試行錯誤しながら授業を試みてきた。上述の方法が受講生の動機づけとスコアアップの点で、一番好ましい結果が出ている。受講生のスコアは平均して 70 点程度伸び、TOEIC の自主学習をしない受講生でも最高で 150 点程度伸びた例もあった。（もちろん、ほかの英語の授業の効果もあるだろうが）。

2.2 問題点

この演習あるいはドリル方式で授業時間中に解答・解説を行っていく際に問題となるの

は、受講生がどの程度まで正答しているか、どの程度まで理解しているか、教員の解説は受講生が必要としている事項に焦点を当てているかということである。奥田（2014）が指摘しているように、授業中に受講生にとって簡単だった、あるいは難しかった問題を教員が把握するのは困難で、解説は教師の長年の勘に依存して行われている。授業中に教員が受講生に「満点だった人」「一問だけ間違えた人」と挙手を求めても、他人の目が気になったり揶揄されたりするのが嫌で、手を挙げてくれる受講生は少なく、あたりの受講生を見回してから適当に手を挙げていたりする。これでは、実際に受講生はどの程度正答しているか把握するのは難しい。さらに、教員の解説は、教員が難しいだろうと推測した語彙や文法事項、長文の内容や翻訳を行う傾向にあるが、これが本当に受講生が解説して欲しい箇所と合致しているのか検証はしておらず、受講生の反応を見た上で判断するか、授業後のアンケート中にある全体的な満足度で測るくらいである。受講生の理解度を正確にとらえて、必要なことを的確に解説することが重要だと考えられる。

2.3 新しい取り組み

今年度は、授業の効果を向上させるべく、新しい取り組みを試みた。受講生に、テキスト中のリーディングセクションの問題を授業前に解いてウェブ上の解答用紙に入力してもらい、その分析結果を事前に教員が見ておくことにした。受講生の読解問題の正誤率とその特徴を知り、授業時にその結果を持参して、多くの受講生が誤答した問題を重点的に解説するようにした。これができるような仕組みを Google form を利用して考案した。その試みを次章以降で具体的に紹介する。

3. Google Form を使った解答用紙作成と授業での利用方法

3.1 Google Form の解答用紙と分析結果

グーグルが提供している無料のクラウドサービスで、アンケートや質問フォームが簡単に作成でき、しかも自動で結果を分析してくれるのが Google form である。グーグルにアカウントがあれば誰でも無料で利用できる。筆者はこのサービスを利用して、図1の通りの解答用紙を作成した。分析結果は「概要」モードでは図2a, b, cの通りに出力される。

図1は、このテキストの読解問題用の解答用紙である。1回につき17問あるいは18問を1つの画面に提示し、受講生に解答として4択（A, B, C, D）のうち1つを選んでもらう形式である。受講生は学校で配布されているメールアドレスを記入し、これで回答者の識別が可能になる。

図2は、回答後の分析結果のうち、「概要」を示している。図2aでは平均点、中央値、得点範囲と点数の分布がグラフで示されている。続いて、図2bの上部では正答率が50%

図 1. TOEIC 解答用紙 (一部)

UNIT2 Reading Part 解答用紙

※毎日の19時30分までに回答してください

メールアドレス*

このフォームでは回答者のメールアドレスを収集しています。 設定を変更

21*

解答 A B C D

22*

解答 A B C D

23*

解答 A B C D

図 2a. 分析結果画面 (1 ページ)

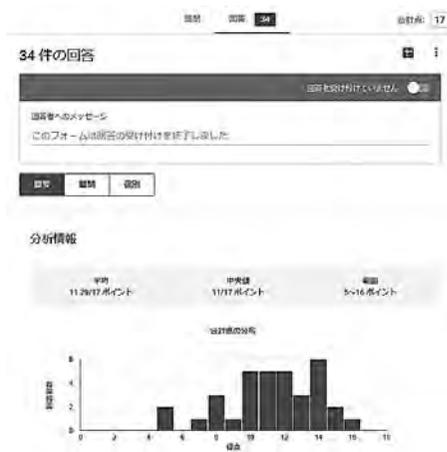


図 2b. 分析結果画面 (2 ページ)

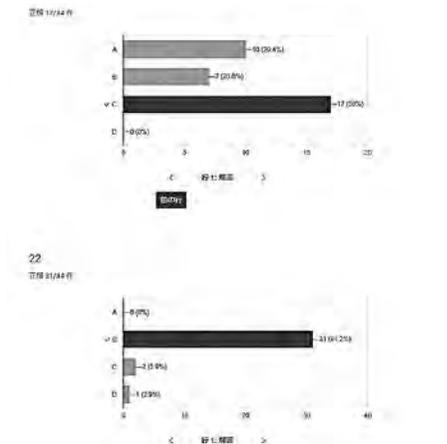
誤答の多い問題

問題番号	正解数	誤答数
25	10/34	24
26	14/34	20
28	16/34	18
33	14/34	20

スコア獲得

メールアドレス	スコア	スコアの通知
19k1075@mecon.ac.jp	13	11月4日 9:48
19k1079@mecon.ac.jp	14	11月3日 10:56
19k1122@mecon.ac.jp	14	11月4日 14:37
19k1072@mecon.ac.jp	12	11月4日 22:16
19k1064@mecon.ac.jp	14	11月4日 23:04
19k1075@mecon.ac.jp	12	11月7日 11:34
19k1071@mecon.ac.jp	14	11月7日 14:50
19k1049@mecon.ac.jp	12	11月7日 18:57
19k1119@mecon.ac.jp	10	11月7日 18:41
19k1013@mecon.ac.jp	14	11月7日 17:26
19k1015@mecon.ac.jp	11	11月7日 18:20
19k1077@mecon.ac.jp	7	11月7日 19:08
19k1081@mecon.ac.jp	15	11月7日 20:29

図 2c. 分析結果画面 (3 ページ)



を下回った問題番号と正答者数が「誤答の多い問題」として提示されている。これは、誤答の多い問題を一目で把握でき、この問題番号を控えておけば、教員は限られた時間内で効率良く詳しい解説ができる。

この図 2b の下部では「スコア獲得」が示され、受講生の入力した時間と獲得したスコアが示される。解答入力をしなかった受講生がわかるだけでなく、誰が一番早くあるいは遅く入力したのか、毎回の高得点者は誰かを知らることができる。たいてい一番遅く締め切りギリギリで入力するのは決まった受講生であり、受講生の性格や特性を知るのにも役立つ。

図 2c では、各問題の正答あるいは他の選択肢を選んだ受講生の割合がグラフで提示される。正答率だけでなく、誤って選び易い選択肢がわかるので、正答とその紛らわしい選

択肢を比較して、なぜ正答の方でなくてはいけないのか、教員は解説することができる。

3.2 解答用紙作成と運用上の留意点

図1の解答用紙のフォーム作成に当たっては、受講生が使いやすく、教員が分析できる結果を最大限に利用できるような工夫が必要である。解答用紙を作成する際には、アンケートフォームではなくテストフォームを使用し、同時に正解と配点を入力し、その他の詳細を設定する。解答用紙のフォームや設定方法により自動で出力されるデータも異なってくる。留意した事項は次の通りである。

まず解答用紙は受講生にとって見易くて入力し易く、実際の TOEIC のマークシートに似たものになるように、丸型の塗りつぶし形式の選択肢（ラジオボタン）を使用した。また、授業前に分析結果が出るように回答の締め切り日時を授業の1時間前に設定した。受講生に対するフィードバックも画面上あるいはメール返信機能を使って設定できる。今回は授業で解説を行うため、正答や解説を受講生には提供せず、解答終了後にクリックすれば正答した問題と総得点が即座に見られるように設定した。なお、受講生の利用にあたっては、大学のムードル上のこの授業のサイトにアクセスし、各週のセクションに貼られたリンクをクリックするだけでフォームが提示されるようにした。したがって、携帯でも学外 PC でも簡単に使用できる。

さらに、大学の受講生用メールアドレスを解答用紙内に記入させると、全体の結果だけでなく、受講生個別の分析結果が得られるので、メールアドレスの記入は必須と言える。図2bの下部に示す通り、分析結果には各受講生の回答日時と得点が提示される。図2は全て「概要」モードの分析結果を示しているが、図2aの中間部に示されている箇所をクリックすればモードの切り替えができ、「個別」モードに切り替えると各受講生の全回答が閲覧できる。また、各受講生の全問題の回答と得点を一覧表にしてエクセルのスプレッドシートとして残すこともできる。

次に、教員が分析結果を見易いように、解答用紙のフォームを工夫した。フォームの1つの「セクション」に全ての問題の解答欄を入力できるが、この場合、分析結果は画面に重なって出力されるので、問題ごとにクリックして結果を見ていかなくてはならず、印刷するのにも不便である。各セクションに1問だけの選択肢を作成し、問題数の数だけのセクションを設定し、これをつなげて解答用紙を作成すれば、分析結果はすべて連続で提示されて勝手が良くなる（図2cの通り）。図1の選択肢（A, B, C, D）のマーク欄が問題番号のすぐ横ではなく、一段下にあるのはセクションを連ねているためである。出力された実際の分析結果の一部が図2cである。

4. 学習者の傾向分析

4.1 分析方法

このオンラインの解答用紙を利用して、テキスト上の全ての問題の正答率と受講生が選んだ回答がグラフで提示された。17問中の毎回の平均点は、10点から12点程度であった。テキストの演習問題は実際の TOEIC より易しく作成されており、正答率をパート毎に比較しても信頼性のある結果が得られるとは思えない。したがって、正答率が低かった個々の問題を取り上げて考察してみたい。

4.2 誤答の多い問題

総受講生は35人であるが、回答は34-35人から得た。正答率が50%以下となり「誤答の多い質問」として挙げられた問題を見てみよう。

まず誤答が多かったのは文法・語彙を問う Part5 の Incomplete Sentences の中の問題だった。そのほかのパートでも、半分以上が同種の誤りだった。誤答の特徴としては、文法（時制・品詞・句や節の構造）と語彙（特にビジネス用語）の知識不足が顕著であった。以下で具体的な例を見ていくことにする。

4.2.1. 文法・語法の誤り

以下の問題例の選択肢では、アルファベットを○で囲んだものが正解で、四角で数字を囲んだものは、多数の受講生が選んだ誤答である。なお、カッコ内の数字は回答のパーセンテージを表している。

次の(1)から(7)は受講生の多くが時制・アスペクトの表現、一致 (agreement)、あるいは品詞を間違えた問題である。

(1) The advertising agency ____ a sales promotion for the new product in the last quarter.

A. will plan (29.4) B. is planned (11.8) C. plans (14.7) **D. planned (44.1)**

上の(1)では波線部が解答の手掛かりとなるが、new につられて未来のことだと勘違いする受講者もいた。実際には「この前の4半期」で、過去の出来事であるからDの過去形でなくてはならない。

(2) The data from the laboratory experiment ____ currently being analyzed.

Ⓐ. is (28.6) B. has (42.9) C. be (8.6) D. have been (20.0)

ここでは being を been と勘違いして完了形を選んだ学生が多かった。この文では「受動態の進行形」となり、is が正解であるが、正解率は極めて低く 30% を下回っている。

(3) Our company is not ____ any job applications at the moment.

A. accepted (42.9) B. accepts (8.8) Ⓒ. accepting (29.4) D. acceptance (5.9)

同様に (3) では「現在のところ受け付けていない」という意味であるから、進行形 C. が正解となる。しかし受講者の半数以上が is につられて受動態になる過去分詞 A. を誤って選んでいる。受動態にすると、下線部以降の残りの名詞句が目的語とならず不自然であることに気付いてほしいものである。次の (4) と (5) は一致に関する問題である。

(4) ... An extensive review of our company employees' airline ticket purchases ____ recently performed ...

Ⓐ. was (14.7) B. were (47.1) C. being (8.8) D. have been (29.4)

長文問題の一文が (4) である。主語は review の単数であるが、下線部の直前の語 purchases を主語と見誤って複数呼応を選んだ者が約半数に上っている。

同様に次の (5) では、「ユニット本体」という意味で単数名詞 unit に呼応して再帰代名詞を選択しなければいけないが、前の warnings を受けてしまったのか、誤って複数再帰代名詞を選んでいる。

(5) ... Make sure that you follow the warnings indicated on the unit ____ as well as the safety suggestions listed below ...

A. it (5.9) B. its (23.5) Ⓒ. itself (47.1) D. themselves (23.5)

次に、句と節の見極めを誤った例 (6) を見てみよう。

(6) Please be aware ____ the airlines weigh baggage and will not allow passengers with excess weight to board.

A. which (14.3) B. for (2.9) C. of (82.9) Ⓓ. that (11.4)

この文は「~をご承知おきください」という意味の命令文である。受講生は be aware

of を熟語として知っているが、これは後には句を選択し、節が後続した場合には of ではなく that を選択するという認識が極めて低いことがわかる。

次に品詞の選択の誤りを見てみよう。

- (7) The company has invented new speakers that ____ increase the sound quality.
 A. significance (34.3) B. significant (17.1) C. significantly (31.4) D. signifies (17.1)

この文では空所に語を埋めなくても文法的に文は成立しているので、付加的な役割を果たす副詞を選択して increase を修飾すると考えなくてはならない。名詞を選んだ学生が多いのは、that の後には従属節の主語が来ることが多いためであろう。受講者はこの用法は that 節内に節の主語がない「主格の関係代名詞節」であると認識できていない。

4.2.2 語彙の誤り

TOEIC で高得点を取るには一般的な語彙だけでなくビジネス用語の知識も必要となる。受講生は語彙力が著しく不足しており、語彙力の増強は必須の課題である。一般的な語彙における誤りを次の (8) から (10) に挙げた。各文中の下線部を含む表現は、(8) 「～することが奨励される (be encouraged to～)」、(9) 「～の際には (in the event of～)」、(10) 「(税関で) 申告する (declare)」であり、これらの英語の語句を知っていないと正解が得られない。

(8) ... Employees are encouraged to purchase airline tickets immediately upon notification of travel requirements.

- A. prohibited (8.8) B. attributed (14.7) C. encouraged (35.3) D. allowed (41.2)

(9) In the event of divorce, you can each keep any property you owned before the marriage.

- A. On (32.4) B. At (20.6) C. In (47.1) D. of (0)

(10) Passengers must ____ all goods to customs upon arrival.

- A. decide (25.7) B. declare (42.9) C. define (25.7) D. delete (5.7)

さらに、ビジネス用語として知識がないと答えられないような問題もある。次の (11) から (13) はそれぞれ「顧客満足」(customer satisfaction)、「謹んで(招待いたします)

(cordially (invite))」「(法などを) 遵守する (comply with)」という英語表現を問うものである。

(11) Maintaining very high customer ____ levels in any fast-growing enterprise is challenging.

Ⓐ satisfaction (41.2) B. satisfactory (11.8) C. satisfying (11.8) D. satisfactory (32.4)

(12) You and your colleagues are ____ invited to attend the workshop on April 22.

A. impossibly (2.9) B. immediately (38.2) Ⓒ cordially (35.3) D. completely (23.5)

(13) ... We thank you for helping us do our part to ____ with city regulations.

A. compare (8.6) B. share (22.9) C. satisfy (20.0) Ⓓ. comply (48.6)

各問題で、四角で囲まれた誤答を見ると、受講生は答えがわからない場合には、比較的頻度の高い既習の単語を選ぶ傾向があることが見て取れる。

これらの例以外にも、同じ傾向を表しているものとしては、「~の前に、~に先立つて」の意味を表す prior to (20.6) が正答の問題では、due to (58.8)、enough to (11.8)、subject to (8.8) の順で誤答が多くなっている。

長文問題では語彙だけでなく文章の内容が正確に把握できておらず、解答を誤る例も見受けられるが、詳細な分析は別の機会に委ねたい。

5. 今後への課題

今回、各問題の正答率を事前に得られたことは、教員が授業中に何を解説すべきか把握するのに大いに役立った。特に、本学科の受講生が TOEIC のテキスト (700 点レベル) において、語彙を知らなかったり文法構造を見極める力がなかったりすることが解答を誤る原因であり、このテキストでは長文読解問題の内容がわからず正答できない訳ではないことが明らかになった。このことから、長文の翻訳を交えた詳しい解説よりも、この授業では語彙増強と文法構造の把握を重点的に教える必要がある。

また、予想外ではあったが、教員が誤答の多かった問題についてひたすら解説を行うと、受講生が退屈してしまうという事態が発生した。授業にメリハリを持たせて受講生に意欲を持たせるには、やはり問題を解いて直後に答え合わせと解説という組み合わせをリスニング前半、リーディング後半と展開した方が効果的に思える。

さらに、今回は、テキストのリーディング問題を受講生に宿題として課したため、12

分で解くことが原則ではあるものの、実質的には何分でも費やせた。解答時間を守らせるためには授業中に問題を解いて回答を入力してもらう必要があるだろう。今後は、授業中に受講生が問題を解いた後に、学内 wifi を使用して携帯電話で回答を入力してもらい、教員は教室にパソコンを持ち込み、即座に結果分析を見ながら授業で解説するという方法を試してみたい。回答入力時間はどの程度なのかが懸念されるが、長時間かかれば答え合わせと解説の時間が短縮されてしまうので、手際良くできるように準備を進めていきたい。

参考文献

- 奥田裕司 (2014) 「紙媒体テキストにおけるデジタル拡張機能の開発 - 英語授業を活性化する仕組みと仕掛け作り」『福岡大学人文論叢』46 巻第 1 号 . 97-129
- 佐藤浩子 (2013) 「スマートフォンと無料クラウドサービスを利用した web ベース宿題実践：より良い授業外学習への取り組み」『近畿大学教養・外国語センター紀要』第 3 巻第 2 号 . 189-209
- Stafford, M. D. (2017) *Successful Keys for the TOEIC Listening and Reading Test 3: goal 700*. Tokyo: Kiriara Shoten.